＜2022 年　第 6 回　都市環境デザインセミナー＞

テーマ：「企業町内会　(社)御堂筋まちづくりネットワークの 20 年とこれから」

＜日時＞
2023 年 1 月 24 日（火）18：30～20：30
＜場所＞
会場：(株)竹中工務店 1 階「いちょうホール」＋Zoom 配信
＜参加者＞　　会場参加：１６名（JUDI 会員 6 名、一般１０名）、
　　Zoom 参加２２名（JUDI 会員 7 名、一般１４名、一般学生 1 名）

＜話題提供者＞
髙梨 雄二郎 （一般社団法人御堂筋まちづくりネットワーク 事務局長（株式会社竹中工務店 特任参与）
篠原 祥 （ARC 地域力研究所代表（都市環境デザイン会議理事））

＜テーマ＞
「企業町内会　(社)御堂筋まちづくりネットワークの 20 年とこれから」

＜趣旨＞
一般社団法人御堂筋まちづくりネットワークは設立 20 周年を迎え、設立以降「上質なにぎわいと風格あるビジネスエリア」を目指して価値向上を図ってこられました。今回は御堂筋まちづくりネットワーク事務局長である髙梨雄二郎氏と設立時に中心メンバーとして携われた篠原祥氏に登壇いただきます。「大規模開発を伴わない既成市街地でのエリアマネジメント活動がどのようにして立ち上がり、継続し、発展してきたのか？」「”車から人へ”という大きな流れの中でどのような方向へ向かうのか？」など、設立から現在に至る取り組みや今後の展望についてお話しいただきます。2017 年の御堂筋完成 80 周年から 2025 年の大阪・関西万博、2037 年の完成 100 周年に向けて大きく進化していく御堂筋にまつわる都市環境デザインについて意見交換したいと思います。奮ってご参加願います。

セミナー世話人　藤川 敏行

＜講師紹介＞
髙梨 雄二郎 （たかなし・ゆうじろう）
1982 年に京都工芸繊維大学工芸学部建築学科卒業し、株式会社竹中工務店入社。設計部門にて事務所ビル、ホテル等の設計に携わった後、1986 年より開発計画本部にて大規模複合開発、集客施設開発、市街地再開発やＰＦＩ等、都市計画手法を活用した開発プロジェクトに従事。2013 年開発計画本部長（西日本担当）、2016 年役員補佐を経て 2019 年より現職。2010 年より一般社団法人御堂筋まちづくりネットワーク事務局長としてエリアマネジメントに携わっており、「最新エリアマネジメント（編者：小林重敬）」にも執筆。2019 年からは一般社団法人大阪ビジネスパーク協議会の運営委員長をエリマネ業務と

して兼務。1 級建築士。

篠原 祥 （しのはら・やすし）
1984 年に京都大学大学院建築学専攻を修了し、大阪ガス(株)に入社。主に都市開発、社有地開発の業務に従事し、大阪ドーム、USJ などのプロジェクトに携わる。2000 年頃より大阪都心部での様々なまちづくり活動に公私両面で参画。御堂筋まちづくりネットワークでは設立から 10 年間、プロモーション部会長として活動。2016 年に大阪ガスを円満退社し、まちづくりコンサルタントを設立。2018 年、公募により大阪市都市整備局長に就任。2021 年に退任し、コンサルタント活動を再開、御堂筋まちづくりネットワーク設立 20 周年記念誌制作に携わる。技術士（建設部門・都市及び地方計画）、1 級建築士。

＜主催＞
都市環境デザイン会議・関西ブロック

一般社団法人御堂筋まちづくりネットワークの概要

藤川 敏行

御堂筋まちづくりネットワークは、竹中工務店や大阪ガスさんが主導している「大企業型エリマネ団体」と思われているかもしれませんが、実はそうではないというのが本日のポイントです。

「できるところから始めよう」という姿勢で「企業町内会」的に始まった活動であって、「手弁当で自ら動く」ことがベースにあり、「会費も低額」であり、いまだに「専任の事務局員を置かず、専用スペースも有していない」団体となっています。そして地道な活動の積み重ねにより、信頼を得られる団体となり、行政機関との連携が深化し、組織形態も任意団体から一般社団法人へと移行し、公的な役割まで担う団体へと成長してきました。

このような経緯を経て現在の形となり、美化緑化事業、セットバック空間の利活用、景観マネジメント、エリア防災活動、パークレット、にぎわい創出イベントなど、御堂筋における多様な活動が広く知れ渡ることで、他都市の既成市街地でのエリアマネジメントの推進に役立つのではないかと考えました。

つまり、特定企業による大規模新規開発でのエリマネや多くのビルを所有している特定の企業が引っ張っていくエリマネといった「特殊解」ではなく、大都市都心部の既成市街地における多様な不動産所有企業による、「成長型」のエリマネであることを伝えたいと考え本日のセミナーを企画し、お二人のほうで取りまとめをいただきました。

少し前置きが長くなってしまいましたが、冒頭の30分で高梨様から会の概要をお話し頂き、その後篠原さんにバトンタッチ20年の活動の前半について主に話をしてもらいます。再び高梨さんのほうにバトンタッチをして活動の後半をお話し頂き、最後の約30分で質疑・意見交換と進めていきたいと思います。

それでは、お二人にお渡ししますので、よろしくお願いします。

一般社団法人御堂筋ネットワークの概要

高梨 雄二郎

●本日の講演内容

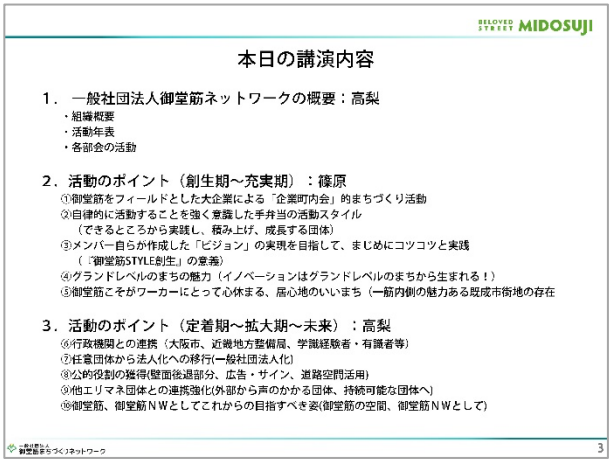
皆さん、こんばんは。私は御堂筋まちづくりネットワークの事務局長をしております高梨と申します。よろしくお願いいたします。竹中工務店に所属しております。きょうは、御堂筋ネットワークについてということで、今の藤川さんのお話をもう少し具体的に、中身について特に後半の部分についてご説明させていただきたいと思います。マスク、取っていいでしょうか？　昨日、岸田首相も国会でも取ってるみたいですので、われわれも取らさせていただきます。あらためまして、高梨です。よろしくお願いいたします。

そうしましたら、最初に、本日の講演させていただく内容の構成です。先ほど藤川さんからもございましたが、まず最初の30分、一般社団法人についてということで、私のほうから、概要をご説明させていただきます。約30分。活動のポイントというところが二つございます。きょうは、どちらかといいますとこちらのほうを少し重点的にしゃべりたいんですが、まず創生期、充実期ということで、今、お手元の資料の年表の中でも、上のところに、ちっちゃな字で恐縮ですけども、創世期と充実期、書いておると思いますが、約2001年から2008年までの間、こちらを篠原さんにお話をいただきます。それから、3番目に二つ目の活動のポイントということで、定着期、2009年から現在までについて、私のほうで説明させていただこうと思っております。

ポイントの中で、特にお話ししたいことを少し最初にお話をしておきます。まず、最初の創世期から充実期につきましては、御堂筋をフィールドとした大企業による町内会的な街づくりの活動でありますとか、あるいは自律的に活動することを強く意識した手弁当の活動スタイルの中身であるとか、あるいはメンバーが自ら作成したビジョンを、実現を目指してこつこつと実践してきたっていう中身、それから、グランドレベルでのまちづくりの魅力のことであるとか、御堂筋がワーカーにとって非常に心休まる居心地のいい場所であるということを、われわれは認識して、それを目指して活動してきたという、この辺りをご説明したいと思います。

後半は私のほうから、特に活動が定着し拡大していくとき~~に~~でございますので、行政機関との連携の中身でありますとか、あるいは任意団体から法人化して般社団法人になったこと。公共的な役割を、われわれエリマネ団体、担うようになりましたので、その辺りの話。他のエリマネ団体との連携強化などもお話ししていきたいと思います。そして最後に、御堂筋と御堂筋ネットワークとしてのこれから目指すべき姿というのを、私どもなりに団体として考えておりますことをご紹介したいと思います。

きょう、申し遅れましたけども、会場には10人のＪＵＤＩ会員の方、それから一般でご参加いただいている方も来ていただいていますし、ウェブのほうには一般の方が結構入っていただいていると聞いておりますので、エリマネ活動の一つのモデルっていいますか、形としてどういうものがあるのかということをご紹介できればと思っております。よろしくお願いいたします。

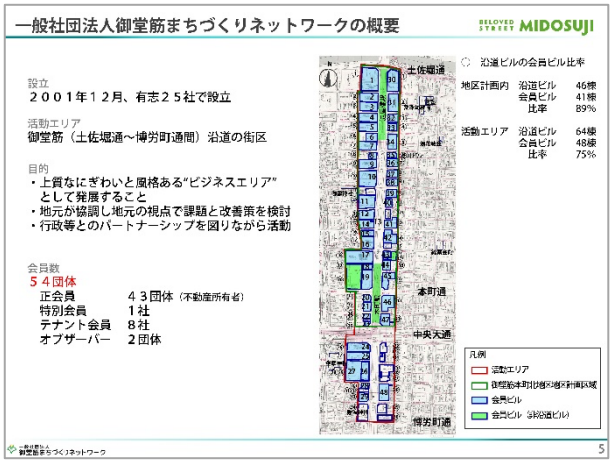


●御堂筋まちづくりネットワークの概要

そうしましたら、次に参らさせていただきます。御堂筋ネットワークの概要です。お聞き及びの方もおられるかもしれませんけれども、この御堂筋まちづくりネットワークは、2001年に設立~~を~~しております。最初、有志25社でした。活動エリアとしましては、御堂筋の土佐堀通から、右の図でありますとおり、博労町までの沿

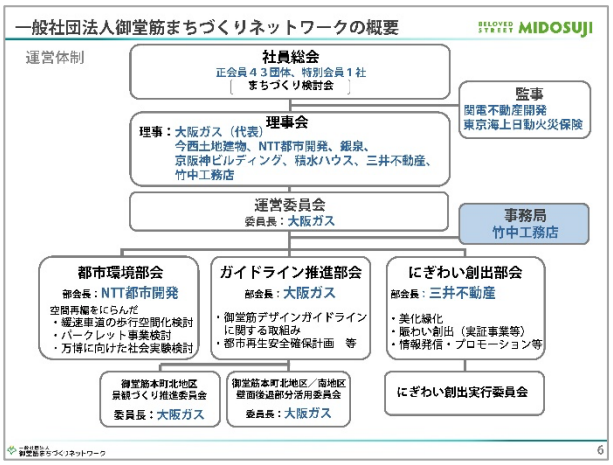
道、街区を一つの活動エリアとしております。目的としましては、上質なにぎわいと風格あるビジネスエリアの発展、地元が協調し地元の視点で活動、課題と解決を検討していく、それから行政とのパートナーシップを図りながら活動するっていうことで進めております。現在、54団体、こちらの沿道のオーナー企業、土地所有者でありますとか、ビル所有者の企業さま、それ以外に特別会員と、それからもう一つ、テナント会員ですね、沿道ビルのテナントさんが入っていただいています。

こちらが活動エリアのビルの所有、加入率をちょっと表現しておりますが、活動エリア全体では75パーセントのビル~~の~~加入率になっております。地区計画というのは、実はこの中央大通から北側の所に都市計画が設定されておりますが、この中でいきますと、90パーセント近くま



でのビル加入率になっているという状況です。ちょっと変わったところは、この御堂筋の下の所に会員ビル、非沿道ビルというふうに緑で書いておりますけども、これ、Osaka Metro さんです。Osaka Metro さんの建物の所有権が御堂筋の下にありますので、そこが持っておられますので、入っていただいております。

運営体制です。一般社団法人になりましたので、社員総会、理事会、運営委員会という形式で運営をしております。代表企業に大阪ガス様がなっていただいておりまして、理事会はご覧の企業、それから竹中工務店は事務局を務めております。その下に部会が三つございます。また後で部会の中身をご紹介いたしますが、まず一つが都市環境部会。ハード面の道路の空間再編をにらんだ緩速車線の歩行者空間化の検討でありますとか、それから社会実験をしております。後でご紹介しますが、パークレットの検討。25年に万博がございますので、万博に向けた、街路を使った社会実験の検討などもこの部会で行っております。二つ目がガイドライン推進部会です。名前のとおり、大阪市が地区計画の絡みで設定しております、御堂筋デザインガイドライン、それから地区計画が設定されてますが、そういったものに対する会としての関わりを述べていく、あるいは検討するための部会です。それともう一つ、都市再生、安全確保計画、いわゆる防災ですね。エリア防災を検討すること



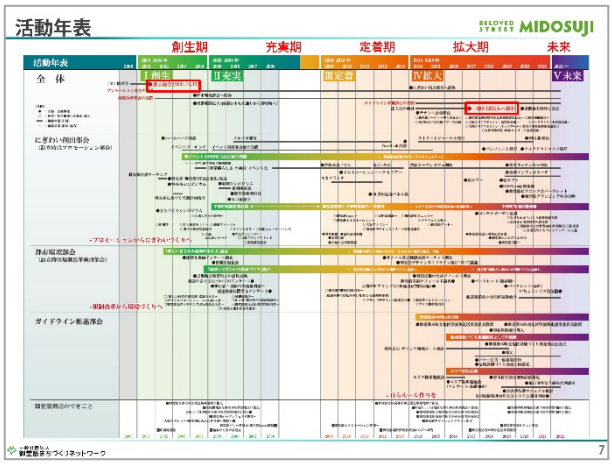
も、この部会の中でやっております。三つ目がにぎわい創出部会。主に名前のとおり、美化・緑化、にぎわい創出のイベント、それから情報発信などをやる部会ということで、運営をしております。

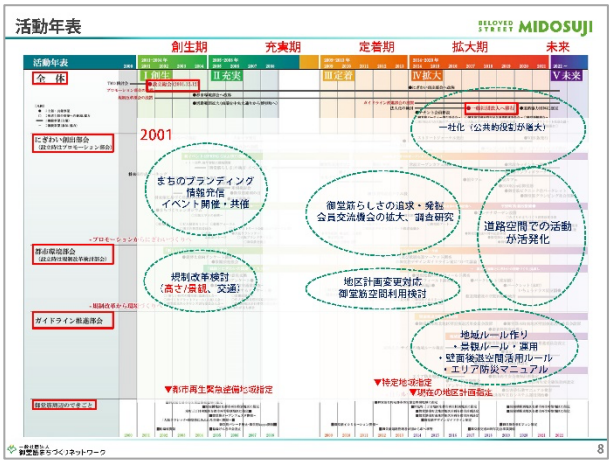
次に活動年表でございます。大きく、上にありますとおり、創世期、充実期、定着期、拡大期、未来ということで、それぞれの部会の活動を入れておりますが、ポイントで申しますと、少しこちらのほうで整理させていただいてます。まず全体としましては、図を見ていただいたら分かりますとおり、一番左端の所に2001年に会が設立してるということと、もう一つ大きな節目は、2017年の一般社団法人化。これによって公的な役割が増大してきたと経緯がございます。これにつきましては、特に御堂筋の中で2001年に都市再生緊急整備地域の指定を受けまして、いわゆる街区の民間開発、あるいは民間の活動をより促進していこうという動きがありました。

これに呼応するような形でも設立はなされております。

それから、もう一つは 2012 年から 14 年にかけまして都市再生緊急整備地域の特定地域と地区計画が設定されたということで、街路の使い方、あるいは計画の進め方なども、いろいろ規制とかあるいは誘導がなされました。これを受けて、一般社団法人化をして活動していくという節目へのつながりがございます。

まず最初ににぎわい創出部会の運営が始まりました。例えば創世期、充実期には、どちらかというと街のブランディングとかイベントの開催とか、こういったことを行っておりました。都市環境部会のほうでは、このときに規制がいろいろ出ましたので、それに対する改革の検討なども行っておりました。その後、定着期、拡大期のほうに移行してきまして、にぎわい創出部会などでは、御堂筋らしさの追求でありますとか、会員交流の機会を拡大しているとか、あるいは調査・研究なども進めていくようになりました。都市環境部会のほうでは、地区計画の変更がここで起こってきますので、それに対する対応などもここで検討していっております。あと、節目になります、一般社団法人になりました後、道路空間の活動っていうものが公的な位置付けを受けましたので、活発になってきているというような大きな流れがございますのと、もう一つは、ガイドライン推進部会というものを新たに立ち上げて、行政が行っていこうとしている地区計画に対して、自分たちもある一定の発言をしていこうということで、活動を進めてきたという経緯がございます。





●賑わい創出部会関連の活動

では、部会ごとのご説明をさせていただきます。まず、にぎわい創出部会です。美化・緑化と申しましたところの活動ですが、まず、右にあります写真のとおり、清掃活動ですね。こういったものは、他のエリマネ団体と同じようにかなりの頻度で進めております。緑化につきましても、こういった彫刻の横のプランター、また、お帰りのときとか別な日でも見ていただいたら分かりますけれども、かなり充実してきております。それから、平野町街園と申しまして、大阪ガス様のコーナーのところですね、こちらのほうの街路の植栽帯の整備なども行ってまいりました。いろんなところで、この 2017 年以降、評価いただいているような活動でございます。

もう一つにぎわい創出部会としましては、沿道のワーカーもしくはテナントさんを支援するような活動、テークアウトのマップを作ったり、キッチンカーを出していただいたりというような活動。それから、もう一つは、オープンエアな空間の社会実験ということで、後でまたご説明しますが、街路の建物との間のオープンスペースを使ったにぎわいの創出なども活動の一環と~~して、~~しております。それを御堂筋グランピングという形で、今、イベントをしておりますので、これも後でご紹介させていただきます。それと他の公民団体との連携ということで、大阪クラシックというイベントですね、こういったものとの連携を図っていくような活動も進めております。

先ほどのものをもう少しビジュアルで見ていただきます。こちらが美化・緑化活動ということで、植栽の剪定、それから清掃活動なども進めております。先ほどの沿道のワーカー支援ということで、こういう壁面の一部後退しました部分を使ったオープンカフェの整備。それから、キッチンカーなどの活動をされる事業者さんをエリマネ団体として支援しているというような動きをしております。

オープンエアな社会実験ということで、街角のコンサートでありますとか、これは三井不動産さんが odona 前でされているイベントですけども、こういったものにも、われわれも協力して参加しております。あるいは、御堂筋グランピングということで、オフィスワーカーのワークプレースというものをコロナの時期に具体化できないかということで、こういうトライアルもさせていただいております。

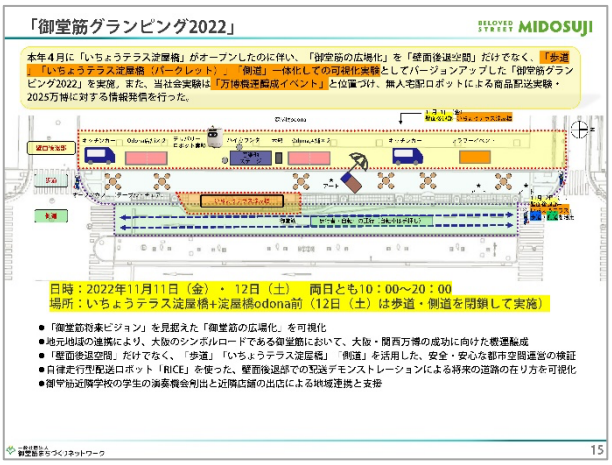
御堂筋グランピングと~~は~~先ほど申しましたものが、実はこれでございまして、昨年の 11 月 11 日と 12 日に、2 日間、行いました。いちょうテラスという少し歩道部分と車道部分を使った

テラス、それにプラス、odona 民地内と歩道、側道を使うということで、これ、平面図ですけれども、こちらが道路ですね。これ、道路の側道です。これが歩道部分です。ここから官民境界がありまして、この上が壁面後退部分と、あと建物があるんですけども、この建物の前の部分を使ってイベントをいたしました。キッチンカーを出したり、それからステージを使ったりして、イベントをいたしました。

これは、一つにはここにありますとおり、歩道、いちょうテラス、これを一体で使うことに

よって、この特に緩速車線の部分の所の自動車を排除して、このときには歩行者空間にしておりますけれども、こういったものを歩行者空間にすることによって、逆に歩道と壁面後退部分というこの空間を一体で利用できるようになっていくんじゃないかと。そうすることによって、このにぎわいもしくは憩いの空間が具体化できるんではないかということで、やっております。

最近のことですので、万博の醸成イベントというものもこの中に盛り込まれております。これ、やってるときの風景ですね。こういうキッチンカーを出したり、イベントをしたり、コンサートをしたり。右下の写真でいきますと、歩道の部分の所に人が集い、緩速車線、道路が通ってる人が歩いてる、こういったものを具体化いたしました。2 日間だけですけども、こういう社会実験もしております。万博のキャラクターも入ってもらって、万博との連携っていうことでありますとか、それから、まだまだ初期ですけれども、自動走行ロボットを使ったデリバリーデモンストレーションであるとか、こういったことも実験していこうということでしております。以上がにぎわい創出部会です。

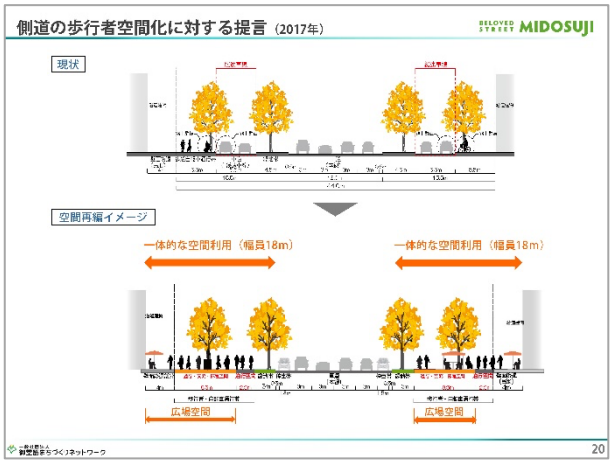


●都市環境部会関連の活動

都市環境部会のほうに移ります。都市環境部会のほうは、先ほど申しましたように、御堂筋の空間再編、これをメインの課題としておりまして、一つには空間再編に向けたいろんな提言を進めてまいりました。2001 年に設立後、2004 年に緑陰とにぎわいの街路づくりの提言を。2017 年以降は、ちょうど御堂筋の 80 周年が 2017 年でございましたので、2018 年度の御堂筋将来ビジョンを市がつくるものに向けて、エリマネ団体としての具体的な空間の検討を開始したということでございます。そういう空間の再編の提言をするだけではなくて、道路空間の中の再編に向けた一つの可視化をしていこうということで、先ほどから紹介しておりますパークレット、こういったものを側道の停車帯と歩道の所に整備して、そこに歩行者の憩いと、少したむろするようなワークスペースも含めた空間をつくるということを進めております。これ、2020 年以降、道路協力団体という指定を、国交省のほうから受けまして、道路上での活動をできるようにということで、団体として指定も受

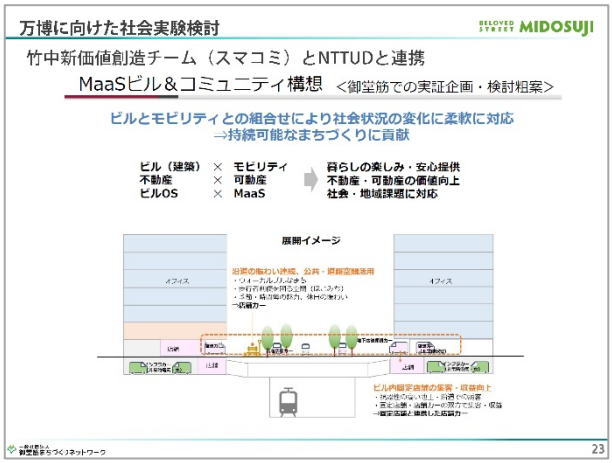
けて、進めております。

側道の歩行者空間化っていうものは、一言で言うとこういうことです。現状の 44 メートルの御堂筋の両側にあります歩道と車道を歩行者に開放することによって、壁面後退部分から緑地帯までの約 18 メートルの一体的な空間を、両サイドに設けるというようなことです。それによりまして、歩行者と自転車が一部通りますけれども、広場の空間ができるんではないかということを目指しております。これは御堂ネットが目指しているというよりも、行政のほうがそういうことを進めていくことに対して、御堂ネットしてもいろいろ提案してるという形です。それを可視化していこうということで、2017 年、先ほど申しましたように、御堂筋 80 周年記念の事業の前に、それに合わせて半年間ですが、2017 年から 18 年 5 月まで、社会実験で御堂筋パークレットを設置いたしました。



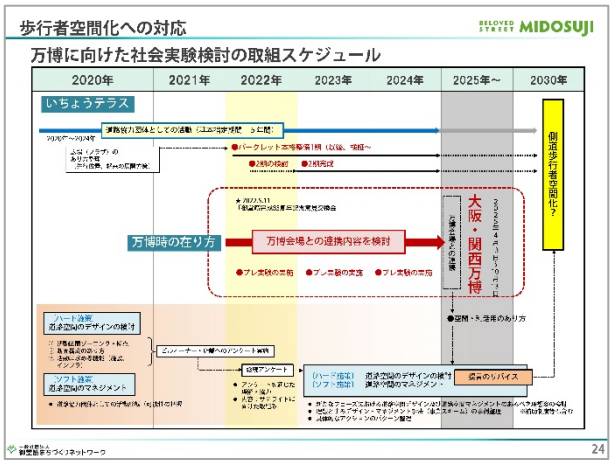
現在、2022 年から 25 年の 3 月末までの社会実験ということで、淀屋橋 odona 前にいちょうテラス淀屋橋というものを設置しております。これは先ほど申しましたように、右下の写真で見ていただきますと分かりますが、歩道と、向こう側に見えてますのが車道ですけれども、こういった所で一部歩道を車道にせり出して、そこで歩行者のための空間を充実させたということでございます。

もう少し将来的なことを申しますと、万博に向けた社会実験ということで、特に竹中工務店と NTT 都市開発さんとで連携もしながら、MaaS 構想ということで、もう少し申しますと、ビルとモビリティーの組み合わせによって、社会状況の変化に柔軟に対応するようなことができないかということで検討しています。具体的にはキッチンカーみたいな店舗カー、あるいはインフラの車がビルの中の機能を、道路側に移動車やモビリティーが出てくることによって、ビルの中の機能とつながっていくということです。街路をうまく使ってビルの機能がより街路ににじみ出てくるということを、ICT も使って具体化していこうということで、検討しており



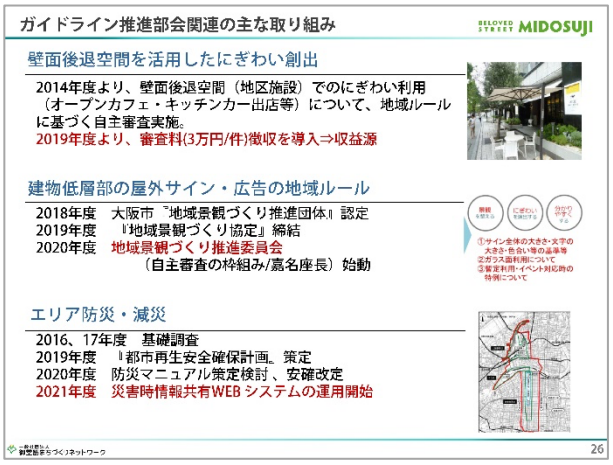
ます。

スケジュール感ですけども、先ほど申しましたように、いちょうテラス、22 年の春にパークレットを本格設置しまして、25 年の春まで可視化の社会実験をします。ご存じのとおり、大阪万博がこの 4 月からありますので、これに向けた一つの活動ということで、進めております。今年、来年も、先ほど申しましたようなモビリティーを使った街路の使い方、あるいは道路の活用の仕方というものを、われわれエリマネ団体としてもプレ実験を実施しまして、最終的には、万博以降、側道部分は歩行者空間化していくことに対する、われわれとしての提言をリバイスしていくということを目指しております。



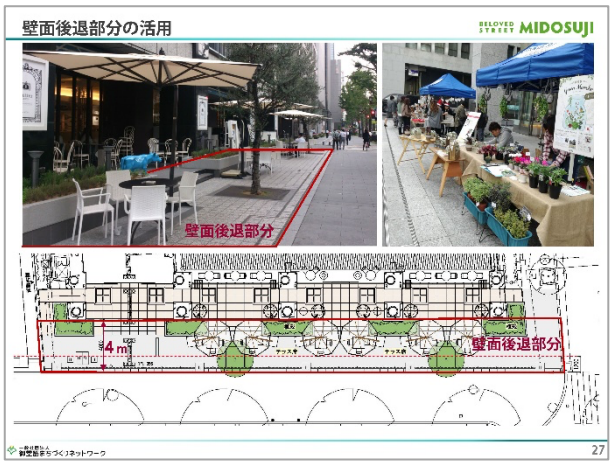
●ガイドライン洲新部会関連の活動

最後に、ガイドライン推進部会の活動です。こちらは幾つかございまして、主に三つです。一つは、壁面後退部分、先ほどちょっと申しました、外部の建物の前の部分ですけれども、こちらにつきまして、そこを使ったにぎわい空間の利用をするときに、いろんな事業者さんが野放図に進めていくということは、やはり統一が取れませんので、地域ルールとして自主ルールを決めまして、自分たちでデザインをコントロールしていくことを目指そうということでございます。19 年からはそちらの審査料も少し取って、これを逆に収入源にしております。二つ目は、建物の低層部の屋外サインとか広告の地域ルール、これも建物には幾つかサインがございますけれども、これについて、大阪市の地域景観づくり推進団体の認定を受けて、地域景観づくり委員会というものを運営することによって、屋外サインと広告を自主ルールの中でハンドリングしていくということもやっております。三つ目が、エリア防災と減災活動ということで、緊急整備地域に指定されたということによりまして、都市再生安全確保計画というものを策定しておりこの中で防災マニュアルの策定、もしくは、よりそれを実現・実装していくためのシステムづくりというものを目指しておりまして、21 年にウェブシステムなどもこちらのほうで作りました。



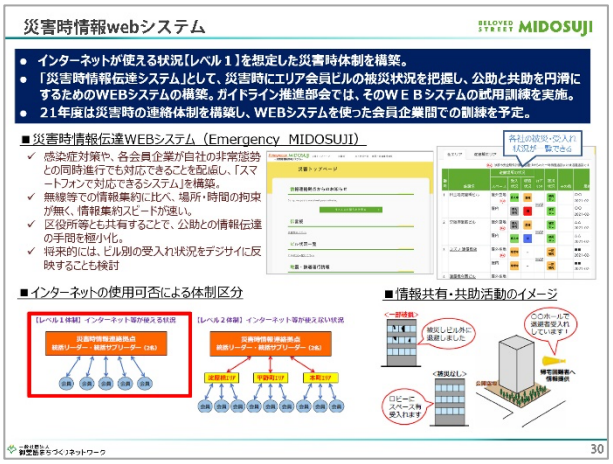
壁面後退部分というのは、歩道と官民境界の間から 4 メートル、セットバックした所が壁面後退でこちらの部分です。下の図で見ていただきますと、一番下の白地の所が車道と歩道で、グレーに塗ってます所で 4 メートルと書いてます所が壁面後退部分ですね。そこの活用の仕方です。こういった事業者さんがマルシェをされたり、それからキッチンカーを一出されたり、あるいは左下にありますとおり、オープンカフェをされたりするときに、ここにかっこ書きで

書いてます事業者さんから頼まれたビルオーナーさんから、審査料をいただいて審査をしております。いろんなデザインがございますけれども、例えば右下の写真のキッチンカーなどにもありますとおり、少しデザイン的にも統一感のあるものをしていただくようなことを、お願いしております。これは地域景観づくり推進委員会というものの活動の事例で、右にあります写真のとおり、建物のサインですね、こういったものをこれでいいのかどうかも含めた審査を、左にありますような委員会をつくって、エリマネ団体で自主的な事前の審査というものをしております。



役職	企業・団体名	氏名
委員長	大阪ガス株式会社	三好　正人
		山口　翔花
副委員長	積水ハウス株式会社	神門　英昭
委員	NTT都市開発株式会社	菅野　智之
委員	銀泉株式会社	田畑　洋光
委員	京阪神ビルディング株式会社	清水　香里
委員	株式会社竹中工務店	原田　裕
		仲村　侑記
委員	中央日本土地建物株式会社	倉橋　良之
委員	三井不動産株式会社	福田　拓
委員	三菱地所株式会社	福本　竜太
アドバイザー	大阪公立大学大学院	嘉名　光市

最後に、ウェブシステムですね。これ、端的に申しますと、中段の~~所の~~右半分にありますようなスマホの画面、こういったものになるようなアプリを、上に書いてますとおり、インターネットを使える状況、レベル１を想定した災害時の体制として構築しております。まだまだ実験をしているところですけれども、エリアの中の防災の一つの活動、共助を進めていくための活動ということで、右下にありますとおり被災したときの情報でありますとか、あるいは避難受け入れの可能性でありますとか、こういったことを、スマホの情報ツールで情報共有していこうというようなものでございます。



30 分、過ぎました。私のほうからは以上でございます。まず前段としまして、御堂筋まちづくりネットワークの活動のしております中身と、現状のことを、まずご紹介させていただきました。以上です。

既成市街地でのエリマネ活動がどのように立ち上がり、発展してきたのか？

篠原　祥

講師を交代しまして、私、篠原と申します。御堂筋まちづくりネットワークの最初10年ぐらいのプロモーション部会長をしておりました立場で、お話をさせていただきます。どうぞよろしくお願いします。

今の高梨さんのお話を聞いていて、今回のタイトルを、“企業町内会　御堂筋まちづくりネットワークの20年とこれから”ではなく、“企業町内会として発足した御堂筋まちづくりネットワークの 20 年とこれから”としたほうがよかったかなというふうに感じました。今、ご紹介のあったようなさまざまな活動をしている団体が、どのようにして苦労しながら生まれたのかというところをお話します。

●公私両面で大阪都心部のまちづくりに関わる

簡単に自己紹介をさせていただきます。1984年に大阪ガスに入社しまして、32 年間、大阪ガスに勤めておりました。その中で、主に都市開発関連の部署におりまして、大規模開発から御堂筋まちづくりネットワークをはじめとするさまざまなまちづくり活動的な仕事、さらにはボランタリーなまちづくり活動に関わっておりました。そして「定年後は都市開発やまちづくりを本業にしたい」と考え、大阪ガスを退社して、まちづくりコンサルタントとして仕事をしておりました。その後、大阪市の局長公募により運よく都市整備局長に合格をしまして、3 年間、大阪市職員として仕事をしておりました。その間は兼業禁止と厳しく言われ、コンサル業は休業しており、一昨年 4 月からコンサルタントに復帰しております。2001 年から 2010 年まで、御堂ネットのプロモーション部会長をさせていただきました。その後、10 年ぐらいブランクがありまして、一昨年からこの20周年記念誌制作にコンサルタントとして関わりました。本日はは主に最初の10年間の話プラス、当時の思いにもつながる記念誌制作の中で得たことをお話したいと思います。

まず、これまでの活動事例を簡単にご紹介しますと、2000 年頃から御堂ネットの活動と同時期に、手作り絵はがきで大阪のまちを発信する活動、三休橋筋の活動、産官学が連携して社会実験をおこなうような活動などに関わりました。その後、姫路に転勤したのですが、大阪での経験を生かしながら、姫路のさまざまなまちづくりにも関わり、その後大阪に戻り、コンサルタントとして、今、北新地のまちづくりなどに関わっております。

大阪市役所にいた 3 年間は、「新たな公の力を生み出す（新しい公民連携の形をつくり出す）」ことを主張して都市整備局長に就任しましたので、それを実践し、アフターファイブの活動でも、局の職員と一緒に活動して、局のPRパンフレットを作ったり、卒業する職員の方に後輩に託す思いを語ってもらう会をやったり、おせっかい的に仕事以外でいろいろ役に立つことをやってる人を表彰する制度を作るなど、職員の意識を変えていくことに思いを込めてやっていました。

現在のまちづくりコンサルタント業としては、まず「ARC 地域力研究所」という名称にも私のまちへの思いを込めているのです。A＝Autonomy（自律的）、R＝Local Resources（地域資源）、C＝Collaboration（連携）の意味で、さまざまな地域の力をアップする活動を生み出し広げることをサポートすることを中心に活動しています。

●大阪都心部のまちづくりが活発化してきた時期に御堂ネットが発足

ちょうどこの御堂ネットに関わり始めた 2000 年頃に考えていたことを、少しご紹介します。

今、申し上げたように、大阪ガス時代、大阪ガスの社有地を生かしたまちづくり、大阪ドームの開発とか、USJ という、そういう大きな社有地開発に関わっていました。そういった開発が大阪再生の起爆剤になると信じて仕事をしていましたが、それらは大阪のほんの一部であって、大半の普通のまち、つまり既成市街地はそういった大規模開発では変わらないわけで、それでいいのか？、大規模開発に加えて既成市街地のことを考える必要があるのではないかなというふうに思っていました。

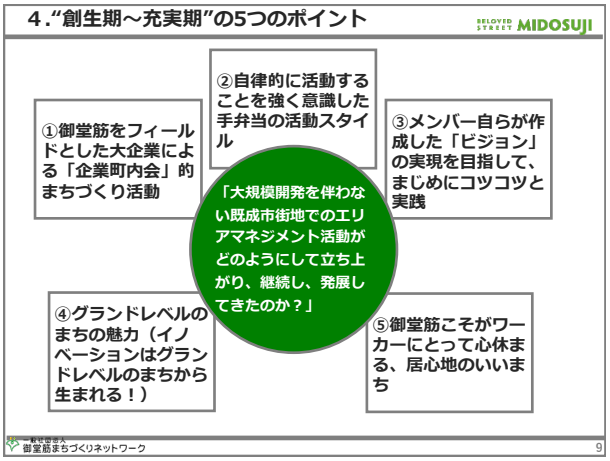
そんな時期に、大阪大学の鳴海邦碩先生からお声が掛かって、都市大阪創生研究会という在阪企業と学識者と大阪市計画調整局が関わる研究会に参加し、そこで船場エリアの再生をテーマに研究しました。ちょうど2000年頃で、その研究の中で既成市街地のまちづくりの必要性を感じ、自律的なまちづくり活動が大切だと自ら活動を始めたのです。

また、本日の主催者である都市環境デザイン会議にも2001年から関わっておりまして、最初の活動として、都市環境デザインフォーラムという年 1 回やってる活動で、「街の遺伝子」というテーマで船場エリアを調査し発信しました。船場の中にはどういう歴史的な積み重ねがあって、それが今にどう生かされているのか、今後、どういう方向に向かっていくのかみたいなことを研究したわけです。

そういった活動の中で、仕事以外のボランタリーな活動もおこなうようになり、三休橋筋や絵はがきの活動などを始めたというのがその時期でして、そんなときに御堂筋でのエリマネ団体の設立に関わるようになりました。先ほどご紹介のあった年表の最初の10年ぐらいと、直近の一年が私が関わったところであり、本日は立ち上げの「創生期」と活動がだんだん充実してきた「充実期」についてお話させていただきます。

●創生期～充実期”の５つのポイント

まずは、図の真ん中、「大規模開発を伴わない既成市街地でのエリアマネジメント活動が、どのようにして立ち上がって、継続して、発展してきたのか？」ということをお話しします。そのポイントを図の５つに整理しました。「御堂筋をフィールドとした大企業による「企業町



内会」的なまちづくり活動」として始まったということ。それから、「自律的に活動することを強く意識した手弁当の活動スタイル」であったこと。「メンバー自らが作成したビジョンの実現を目指して、真面目にこつこつと実践」する活動であったこと。4 つ目、5 つ目は、20 周年記念誌制作で有識者の方や御堂ネットの OB の方からいただいたコメントの中で、これは初期の思いに一致するなと思ったところを取り上げました。「グランドレベルのまちの魅力」、それから「御堂筋こそがワーカーにとって心休まる居心地いいまち」ということ。以上の五つのポイントでお話を進めていきます。

●「企業町内会」的まちづくり活動

まず、企業町内会的なまちづくり活動ということについて。アメリカの BID（Business Improvement District）が注目をされていた1999年頃から、関西経済連合会が大阪版BIDを立ち上げられないかという検討を始め、大阪市計画調整局、経済局も賛同して、御堂筋を対象にそういった動きがスタートしました。関経連のメンバーであった竹中工務店さんから沿道企業に働き掛けがあって勉強会が始まります。最初は、かなり大掛かりな組織づくりをしようという動きだったのですが、「そのニーズはない」と沿道企業の賛同を得られませんでした。

その後、切り替えて小さな組織づくりに進むわけで、手弁当で自ら活動し、低額な会費で専任の事務局員なし、オフィスもなしという方向に切り替え、継続して議論を進めました。そうすると沿道企業からは、「一社でできないことができるかもしれないな」という声や、「今まで隣の企業がどこでどんな人がいるかも知らな

かったが、隣の企業と親しくなるのはエエことやなぁ」という意見、「できるところからやっていって、なんか計画すれば御堂筋が変わるかもしれない、そんな予感がしますわ」といった声が上がるようになり、それで組織を設立しようという動きになったわけです。

この関経連の報告書には、「専属の人を要するような TMO については、さらに検討を要する」という結論、そして今後の方向として、「広く声掛けして社会に認知された地元の集まりとすること、集まりはネットワーク型で、対外的な行動を含めて活動を始めよう」ということがまとめられました。この「ネットワーク型」というのは、専門の人や事務所を設けずに地元の各企業が連携し協調して活動する、そんな形がいいという結論であり、話が動きだしたということであります。

その「ネットワーク型」ということをたいへん意識しており、組織図もよくあるピラミッド型の図ではなく、各会議体が線でつながれていないネットワーク型の図になっています。今回の記念誌づくりの取材で当時の担当者も「そういう趣旨で始めたんや」というコメントがあったそうです。

それで、設立総会を 2001 年 12 月 12 日に開催をします。これがその写真です。その様子はテレビでも放映され、沿道企業の社員にもそういう活動が始まったのだということが伝わったわけで、テレビの影響も大きかったわけです。その当時、代表幹事をされていた竹中工務店の副社長だった方に、20 周年記念誌でインタビューをさせていただきました。そのときのコメントが、「背広姿のご近所さん、そんな御堂ネットであり続けてほしいな」ということでした。当時の産経新聞に「背広姿のご近所さん」という見出しの記事が掲載されたのですが、この方はその切り抜きをちゃんと保管されインタビュー時にわざわざ持ってきてくれたのです。そして「これが良かったんや。こういうことをやりたいと思ったんや」というお話をされました。「自分が代表のときは、集まりやすい負担のかからない活動であるということを意識し、あえて飲み会もしなかったんや」「飲み会することで、飲み会中心になってはあかんという思いと、お金も時間も負担になってはいけないということを意識した。そういう組織運営をしていたんや」ということをおっしゃっています。「なるほど！」と思いましたので、ここでご紹介をさせていただきました。

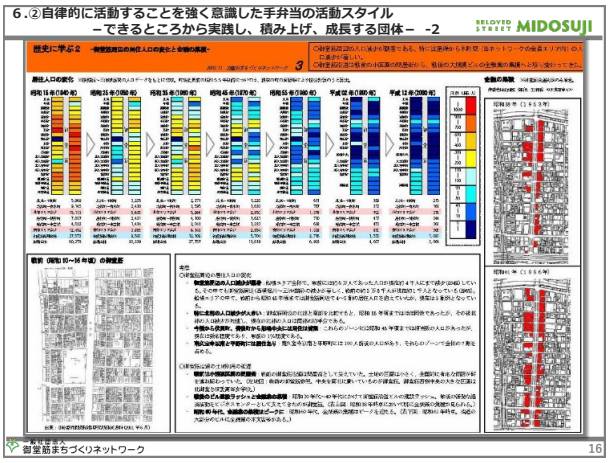
●自律的に活動することを強く意識した手弁当の活動スタイル

次に、二つ目。自律的に活動することを強く意識した、手弁当の活動スタイルについてお話しします。活動の趣旨に挙げています「活力と風格のある御堂筋の実現」、これぐらいは参加した各社は共有できてるだろうと考えながら、第 1 回目のまちづくり検討会をスタートしたのですが、「御堂筋はビジネスのまちなのでにぎわいや活力は不要」という自社ビル企業の意見がある一方、「風格なんかを気にしてるから地盤沈下が進むのだ」というテナントビルのオーナー企業の意見もあり、活力と風格さえ共有できていないということが分かりました。

「どうしていこうか？」。まずは自分たちで将来像を描いて、こういう御堂筋であってほしいっていうようなことを、自ら描くことが大事だろうと。それで思いを一つにしていけないかと考えて、将来像作成ワーキンググループっていうものを、私が部会長をしているプロモーション部会の中に設置しました。これ、本来ならプロモーションとはちょっと違う話なんですね。本来なら組織全体に位置付けた場である必要があるんですけれども、プロモーション部会でやるぞということで声を発すると、6 社の方が「やりますよ」と言ってくれて、一緒に活動を始めたわけです。

自分たちで作ることを目指して、全て手作りです。コンサル委託なしでやりました。文献調

査、フィールドワーク、会員企業とのディスカッション、関係者ヒアリング、会員企業へのアンケートなどです。それらを束ねて、議論して、御堂筋の将来像を、『御堂筋 STYLE 創生-ビジネスストリートの未来を創る・発信する-』というタイトルの将来像を描いたわけです。少しだけご紹介しますと、まずこれは御堂筋の歴史のまとめです。私が担当したんですけれども、人口がどのように変化してきたか、御堂筋の両サイドの人口がどう変わってきたのかということを、戦前から、10 年刻みで示してます。右端が 2000 年の図ですが、人口が激減していることが分かります。昔はこれだけ人が住んでいた御堂筋が、これだけ人の住まないまちになってしまったということわかりやすく示しました。また右の図の赤印は金融機関で、1963 年と 1986 年を比べて、どんどん金融機関が増えてるということを紹介しました。



また今の新しい動きがどうなっているのかということを、フィールドワークをして調べました。平成元年、11 年、14 年で、銀行からにぎわいを生み出すような施設にどのように変化していったのかを図で示したわけです。ワーキングメンバーで調べて、自分たちで作ったのです。さらに経済団体や行政がどのように考えてるのかを、既存のレポートや幹部の方々にインタビューをして、レポートにしました。一方で、ビジネス界のトレンドという非常に難しいテーマについても、何かやってみようと、正しいかどうか分からないですけれども、今、業界でどんな動きがあるのかといったことを、将来を予測するようなことも、素人なりにやったわけです。また、大阪の他のエリアと比べて御堂筋の特徴はどこにあるのかを把握しようと、梅田、中之島、OBP との比較ということもやってみました。さらに世界の中での御堂筋も意識すべきという思いから、ニューヨークの 5 番街、パリのシャンゼリゼ、ロンドンのリージェントストリートと比較し、そういったストリートと並ぶような御堂筋なんですよということも発信したりもしました。一方、会員各社の御堂筋の将来に対する思いについてアンケート調査も実施しました。それらの情報を整理して、御堂筋の将来像を描いたのです。

今回の 20 周年記念誌では、将来像の作成にかかわった京阪神ビルディングの常務（当時）にもインタビューしました。「有志によるボランタリーな活動がベースにあったから、さまざまな活動が定着し、法人化にも至ったのだと思う。そのような活動の流れ、積み重ねということを、これからも意識し続けてほしい」という、とてもうれしいコメントをいただいております。

●「ビジョン」の実現を目指して自ら実践

次に、三つ目です。そのビジョンの実現を目指して、コツコツと真面目に実践してきたわけです。まずは手づくりの将来像「御堂筋 STYLE 創生」を作成、それをシンポジウムで発信し、実現に向けた活動開始し、御堂筋 GALLERY を定着化し、「イベント実行委員会」を設置し、さまざまな連携を推進し、御堂筋をフィールドにいろんな方々の活動を呼び込み、「御堂筋らしさ」というものを真面目に追及して、御堂筋らしさにこだわったイベントを展開してきました。

幾つかご紹介します。まずは手づくりの将来像「御堂筋STYLE創生」です。八つのシーンを

描いているのですが、その一つ一つに「どういったまちになっているのか」「将来、こういったまちになってほしい」という具体的なイメージを、写真と文章で描きました。

次に将来像を大きく発信しようということで「将来像シンポジウム」を行いました。当時から御堂筋のことを気にかけてくれていた橋爪紳也先生を座長にお呼びして、沿道企業の方々、『Meets Regional』の編集長をされていた江弘毅さんもお呼びしました。江さんからはかなり厳しい言葉もいただいたんですけれども、シンポジウム開催後、『Meets Regional』が御堂筋を取り上げるようになったのです。それまで御堂筋は飲食とは縁遠いまちと見られていたのですが、『Meets Regional』で 6 ページぐらいの特集記事が出たのです。江さんもそういう形で応援してくれているんやなということを感じ、とてもうれしく思いました。

そして将来像の実現に向けて動き出すわけですが、最初は手探り状態で、何をしていいかも分からなかったのです。その当時、新しいビル

が 2 棟竣工しました。銀泉備後町ビルとアクセスビル（現在の大阪ガス御堂筋東ビル）で、そこでオープニングイベントをやろうということになり、喜多俊之先生の講演、大フィルコンサート、アクセスビル 2 階のフェラーリレッドのピアノを使ったコンサートなどをおこないました。その翌年からは、その後定着してくる「御堂筋オータムギャラリー」というネーミングで様々なイベントを春秋に集中的に開催することになります。つまり手探りで活動をスタートし、御堂筋ギャラリーとして定例化していくのです。そしてイベント実行委員会というしっかりした組織もつくって、春と秋にイベントをかなり大々的に開催していくということになります。北御堂を使わせていただいたり、赤いピアノのコンサートは何度もやりましたし、沿道のセットバック空間でのコンサートなどを継続したのです。

また、行政との連携や大学との連携も推進しました。御堂筋をフィールドに大学の研究活動をおこない、会員企業とも交流しながら実践型の研究を 3 年続けました。また地域との交流という点では、2002 年に開催された「船場博」という市民参加的なイベントに出展しました。御堂ネットのような企業っぽい、ビジネスっぽい団体が参加するようなイベントではないと承知しつつ、発足間もない時期に地域との交流のきっかけになればという思いで出展したのです。御堂筋をフィールドにいろんなかたがたとの交流を深めて、仲間づくりを進めようという点では、この御堂ビルのショーウィンドウを活用した展覧会や、明治安田生命さんのエントランスでのアート展、ガスビルの 1 階のカフェスペースでの大阪クラシックのコンサートなど、積極的に実施しました。

御堂筋らしさということを真面目に追及して、沿道ビルのセットバック空間があるのも御堂筋の一つの特徴だろうと、そこでイベントをやり、大企業が集まるまちで経営者も身近にいるまちだから、そういう人たちの話をしてもらう「御堂筋放談」という講演会も開催しました。実施する側にとってはハードルが高くて苦労しました。最初は相愛学園の学長、第 2 回が大阪ガスの元副社長、第 3 回が竹中工務店の常務という具合に、御堂ネットの中核会社の身内を引っ張り出して開催し、その後も会員企業中心に講師

を人選してきました。しかしどこかでネタ切れになるわけで、途中からは「御堂筋の経営者たち」から枠を拡大して、陸上の朝原君とか、本日 Zoom で参加されているケイオスの澤田さんなど、御堂筋に関わる有識者の方々にご登壇いただき、計 16 回継続していきました。

次に彫刻の活用についてお話しします。設立から 2、3 年は、御堂ネット自体もあまり彫刻のことを意識しておらず、あるのは知ってるけども、それを活用しようという動きにはなっていませんでした。3 年目に彫刻を活用してみよう

という話になり、そこから試行的に活動を始めるのです。かなり思いを込めていろんなことを集中的にやりました。「彫刻とまちづくりシンポジウム」を開催し、座長に橋爪紳也さん、基調講演には前大阪市立美術館館長で当時金沢 21 世紀美術館館長をされてた蓑豊さんをお呼びしました。また、「彫刻の一斉清掃」もこの時にスタートしました。5 月 11 日が御堂筋完成の日なので、「御堂筋彫刻の日」を勝手に決めて、それ前面に出したチラシをつくり、お揃いの赤いジャンパーを着て、朝の通勤時間帯に彫刻を清掃、御堂筋ワーカーに彫刻に目を向けてもらうことを意識した活動をおこないました。さらに、「彫刻写真コンテスト」「彫刻絵はがきの発行」も行っています。彫刻分野の有識者に集まってもらい、「彫刻活用検討会」を開催、「彫刻に服を着せて、ファッションショーをやったら？」「彫刻を取り外して貸し出しても面白いのでは？」「彫刻ごとに彫刻守を決めよう」といった奇抜なアイデアを出し合い、実現可能なところからやってみるという活動も行いました。

そのほか、沿道の風格あるビルの活用という視点では、ガスビルで「御堂筋交流サロン」という会員企業の交流促進を目指したイベントをおこないました。ガスビル 1 階の御堂筋から見えるカフェで、会員企業メンバーが話題提供したり、御堂筋イルミネーションの第 1 回目の期

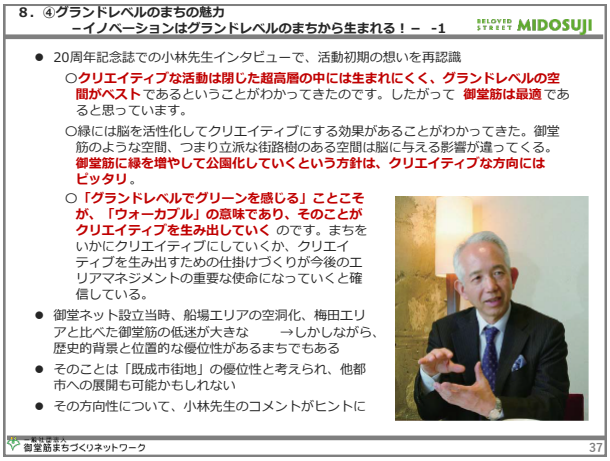
間中にそのデザイナーである長町志穂さんをお呼びしてトークサロンをおこなったりもしました。

●グランドレベルのまちの魅力

4 番目と 5 番目は、20 周年記念誌のインタビューで学んだことを紹介したいと思います。

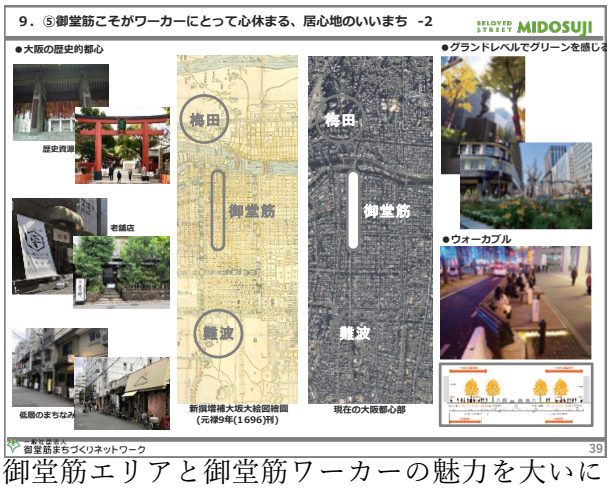
一つ目は、全国エリアマネジメントネットワーク会長である小林重敬先生のコメントで、「クリエーティブな活動は閉じた超高層の中には生まれにくく、グランドレベルの空間がベストであり、御堂筋は最適である」と。リップサービスももちろんあるかと思いますが、これはわれわれを勇気づけてくれる言葉でした。

また「緑には脳を活性化してクリエーティブにする効果があるということが分かってきており、御堂筋に緑を増やして公園化していくっていう方針は、クリエーティブな方向にはぴったりだ」というお話もうかがいました。「グランドレベルでグリーンを感じることこそがウオーカブルの意味であり、そのことがクリエーティブを生み出していく」ともおっしゃいました。われわれが考えている「御堂筋が既成市街地の中にあることの優位性」の裏付けにもなる貴重なご意見をいただけたなと感じ、本日ここで紹介させていただきました。



●御堂筋こそがワーカーにとって心休まる居心地のいいまち

もう一つは、先ほども紹介しました活動初期の規制改革部会長をされてた方のお話です。「御堂筋周辺には地に足の着いた飲食店や喫茶店が多く、ワーカーのためのランチも豊富」「梅田はどちらかというと観光客目当てのお店が多いので、ワーカーにとっては御堂筋こそが心休まる居心地のいい場所だ」「今後は御堂筋



御堂筋エリアと御堂筋ワーカーの魅力を大いに発信してほしい」。そのような心強いお言葉をいただきました。

以上の二つを整理しますと、右が今の御堂筋の航空写真です。御堂ネットのエリアがここにあって、北に梅田、南に難波があります。左は300 年前の地図ですが、御堂筋は骨格としては全く今と同じです。一方で梅田は湿地帯であり、難波はお墓や刑場があるまちの外れでした。つまり、御堂筋周辺で歴史的にいろんなことが積み重なっている、そういう背景であるということは一目瞭然ではないでしょうか。そのように御堂筋周辺は歴史的な資源が豊富で、老舗店もあり、低層でヒューマンスケールなまちなみも数多く残っています。また先ほどの小林先生の話に合わせると、グランドレベルでグリーンを感じるまちであるということが御堂筋の大きな特徴です。右上の 2 枚の写真は、20 周年記念誌の表紙と裏表紙の写真なのです。ここには彫刻とガスビルが載ってるんですけども、それに合わせて緑がある空間であるということを特に意識しており、この方向も小林先生のご意見にあっているなと思います。さらにウオーカブルについては、皆さんご存じの odona 前の「パークレット」が完成し、会としても「ウオーカブルなまちを目指そう」という方針で活動しています。一層グリーンを感じることができ、ウォーカブルなまちになることを願っています。

●創生期～充実期のまとめ

最後に、創生期から充実期をまとめてみました。まずは「多様な業種の自社ビルやテナントビルが集積し、多彩な人材が活動する歴史的都心」ということに大いに可能性を感じています。次に「まずは集まって話し合い、できるところから無理せずにスタート」することが大切で、活動は「自分事として自ら動く」ことがポイントであります。そして「“らしさ”にこだわって地域の資源を掘り起こす」「御堂筋を舞台に多彩な担い手を巻き込んで、連携を図って、仲間を増やしていく」ということも大切です。最後に「さまざまなチャンネルを生かしたまちのPRや情報発信」をすることが、活動の初動期におけるポイントであると思いました。

私からは以上でございまして、続いて、「活動の定着期から未来に向けて」を高梨さんにお話をしていただきます。ありがとうございました。

活動のポイント：定着期～拡大期～未来

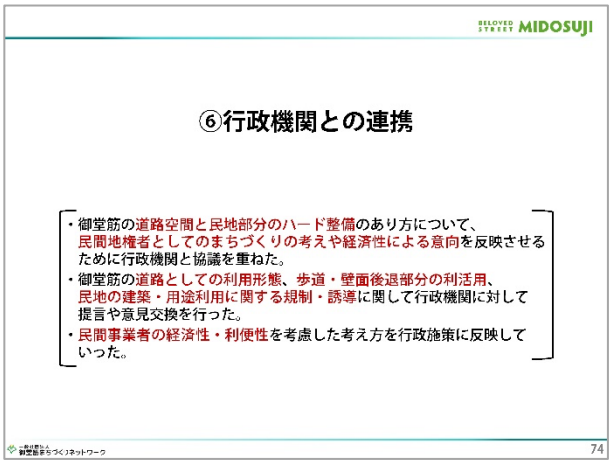
髙梨 雄二郎

1 時間 5 分、たってまいりましたので、だいぶお疲れかもしれませんけれども、定着から拡大期、そして今後の目指す姿ということも含めて五つ程に分けてご紹介をしたいと思います。

●行政機関との連携

まず最初に 6 番目、行政機関との連携です。一言で申しますと、連携と書いてますけれども、ある面では対峙したというような感じでした。先ほど、年表でも書かしていただきましたように、行政の方で規制緩和を行っていろいろ都市開発を進めていこうという動きがありました。あるいは、逆に言うと、今、ご参加いただいていますかたがたの中、あるいはウェブで入っていただいている方にも、お考えがいろいろあろうかと思いますけれども、御堂筋の景観というものを、ある一定、守っていこうというお考えの方もおられました。そういったことを受けて、行政機関のほうもいろいろ考えていきましたけれども、そのような動きの中で、われわれとしては、前に書いております 1 行目ですね、道路空間と民地部分のハード整備、これは当然、建て替えなどをしていくわけで、この中で民間地権者としての街づくりの考え方、あるいは経済性を加味した開発をしていきたいということで、行政機関と協議を重ねたというのが、正直なところです。

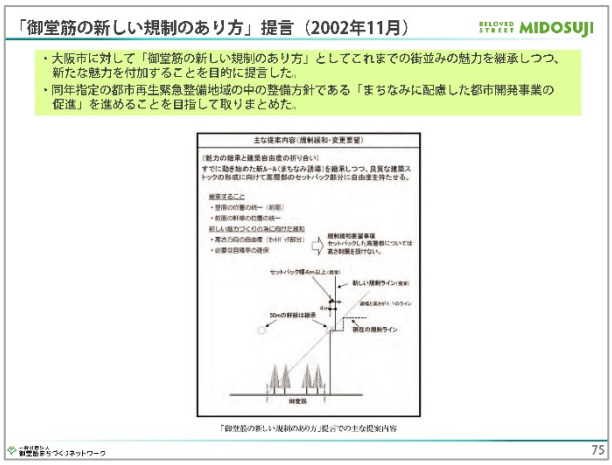
道路としての利用形態、それから、歩道と壁面後退部分の利活用、民地の建築、あるいは用途・利用に関する規制・誘導などを、行政のほうもこの時期いろいろと考えていかれました。それに対して、提言や、エリマネ団体としては意見交換を行ったという立場です。民間事業者の経済性・利便性を考慮した考え方を、行政の方々にあるいは行政のいろんな取り決め、施策に反映していっていただいたというのが、この安定期から充実期の期間でございました。



幾つかご紹介します。先ず御堂筋の新しい規制の在り方の提言ということで、2002 年です。下の図は、われわれ御堂筋まちづくりネットワークの中で作ったものです。上に書いてますとおり、大阪市に対して、御堂筋の新しい規制の在り方として、これまでの街並みの魅力を継承しつつ、新たな魅力を付加することを目的に提言をいたしました。

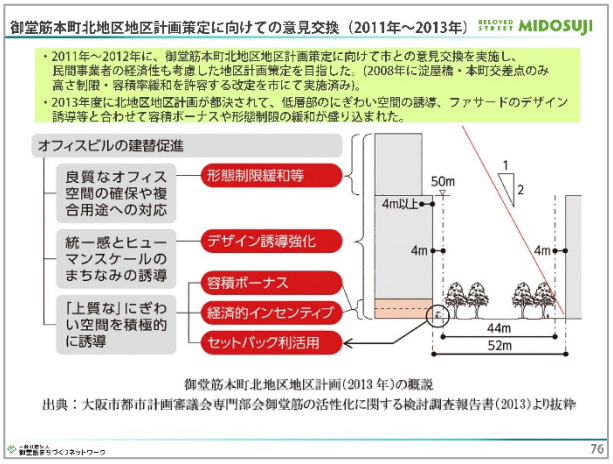
具体的に言いますと、これ、御堂筋の道路で、これ、建物の外郭ラインですけれども、50 メートルの軒先っていうものが御堂筋の地区計画の中で決まっておりました。もう既に 4 メートルセットバックの 50 メートル軒線っていうのを維持するっていうことがございました。その後、少しセットバックした中で、1 対 1 のライン、幅に対する高さですね、これを維持した状態っていうのがそのときの規制だったわけですけれども、それを建物のボリューム感を確保できるよう、4 メートルセットバックした後、建物を高く建てられるようにしてはどうかというような提言をいたしました。もちろん御堂筋の一定の建物の形態規制を維持しつつ、民間の建て替えをするときに、ちょうどこのころ緊急整備地域の指定を受けたとご紹介しましたけれども、いわゆる容積の緩和、容積割り増しというものを受けれるようになりましたので、こういったものを生かすためには上に建物を積んでいくということも必要ではないかということで、提言をさせていただきました。上の 3 行目に書いて

おりますとおり、同年の整備方針にありますように、街並みに配慮した都市開発事業の促進をしていこうという行政サイドで決めていたことにわれわれとしても賛同したということでございます。



次に 2011 年で、1 行目にありますとおり、本町の北地区の地区計画策定の動きがありました。下の図は、これは大阪市が作った最終の地区計画の概要版ですけれども、こういったものを大阪市が作っていかれるときに、上の段の 2 行目に書いてますとおり、民間事業者の経済性に考慮した地区計画の策定をできるだけ進めてほしいということで、いろいろな提言をいたしました。

その中で、下にありますように、上質なにぎわい空間を積極的に誘導しつつも、容積ボーナスを与えるといった、アメとムチとは言いませんけれども、規制の方向性になりました。もちろん、2 段目にありますとおり、ある一定の統一感とヒューマンスケールの街並みの誘導ということを市でも考えておられました。そのようにデザイン誘導はある一定、厳しく行われておりますけれども、上に書いてます形態制限の緩和ということで、建物の高さが緩和されました。このときに私どもエリマネ団体から提案しました、建物は 50 メートル立ち上がった後、4 メートルセットバックして、高さはフリーでもいいんじゃないかという提案に対しては、御堂筋の 1 対 1 ではなくて 1 対 2 ということで、高さを緩和していこうということになりました。上の段の 2 段目に書いてますとおり、低層部のにぎわい空間の誘導やファサードデザインもある一定の規制をするということに合わせて、容積ボーナスや形態制限の緩和がなされたということでございます。これは市が決めた中身です。



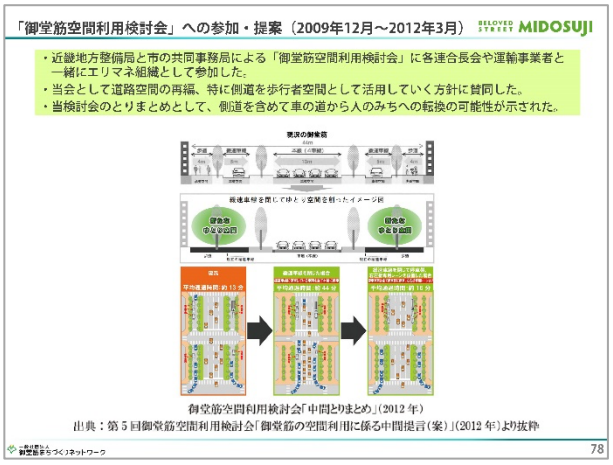
次です。その地区計画のときに、上に書いてますとおり、御堂筋デザインガイドラインというものも決まりました。このときにも、市、それから学識経験者のかたがた、大学の先生、こういった専門家のかたがたとの意見交換を、エリマネ団体としても行いました。2011 年から 12 年にかけてです。下の図は、これも大阪市が取り決めた御堂筋デザインガイドラインの抜粋ですけれども、ページの左半分は、建物のファサードに関する誘導です。これに対しても、意見交換のときには非常に厳しいやりとりがございまして、行政の方が入っておられたりするとご意見があろうかと思いますけれども、行政のほうからはかなり建物のファサードの素材も含めた考え方を誘導してはどうかということもございましたが、やはり民間企業の経済活動の中で、ある一定、自由度を保ってほしいということも含めて、意見交換をいたしました。

あるいは、ページの右半分のところは 1 階部分の建物の用途に関するものでございますけれども、こちらにつきましても、特に御堂筋の北側エリアはオフィス機能が主でございますので、1 階部分ににぎわい機能は必要だと思いますけれども、やはりエントランス空間としての風格といいますか、ある一定のデザインはやっぱりしたいということで、こういった用途の導入につきましても、意見交換をさせていただきました。この中で、上に書いてますとおり、1 階部分の導入用途については、民間事業者の事業展

開の自由度を残しつつ、一定の統一感を維持していくという方向性で議論し、その方向になったかというふうに思っております。

次、近畿地整局と市が共同で事務局をされました、御堂筋空間利用検討会というものがございました。連合町会とか運営事業者と一緒に、エリマネ組織も参加いたしました。この中で、当会としては、道路空間の再編、特に側道を歩行者空間化していくことについては先ほどからもご紹介してますとおり、我々からも提言も出しておりますので、賛同いたしました。

この検討会の中では、下の図は地整局のほうで取りまとめた中間提言の抜粋でございますけれども、特に側道の車道部分、緩速車線ですが、これを閉鎖して歩行者空間化することについて実はちょっと細かくて恐縮ですけれども、下の図の左半分は、現状の車の流れ、真ん中は側道を単純に歩行者空間化してしまった場合の車の流れの時の時間が書いておりまして 44 分。現状で 13 分のやつが 44 分かかるということです。右端が、歩行者空間化を、側道を閉鎖するけれども、一部分、植栽帯を使って停車帯を設けるというようなことをすれば、16 分。こういうシミュレーションをされまして、要は側道を閉鎖しつつも、それなりの空間を作れば、十分に道路としての機能も維持できるという結論付けをされました。われわれエリマネ団体としては、これについても、歩行者空間化についてはぜひとも進めていくべきだということで、お話はさせていただきました。



次が御堂筋空間再編の 2017 年の件です。2004 年に、既にわれわれ御堂筋ＮＷとしても、上に書いておりますとおり、緑陰とにぎわいの街路づくりというものを出しましたが、これについてもう少し改定いたしまして、御堂筋の広場化というものを 17 年には提言いたしました。中段の所の図で見ていただくと、歩行者空間化した緩速車線の部分の所に、一部分人がたむろをするような、あるいはオープンカフェのようなものを提言いたしました。

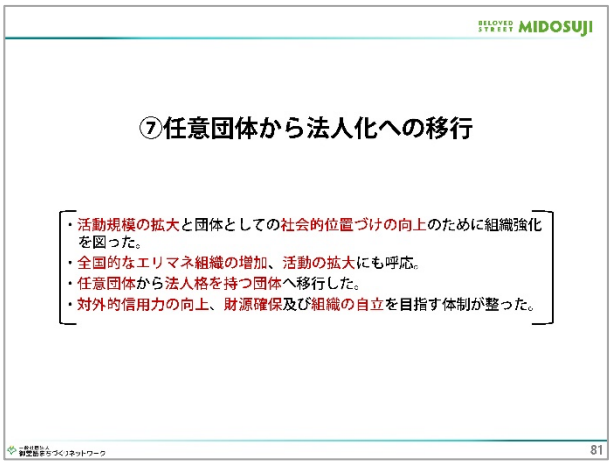
左の図は建物に面したところに溜まりの空間、右の図は道路側に溜まり空間を作って、側道閉鎖による歩行者空間化の充実ということを目指すというわれわれの考えをまとめました。上に書いておりますとおり、エリアの空間的な資産継承、それから上質な憩いとにぎわいの機能、それからもう一つは、人が避難する場合のエリア防災機能、さらには、最近のコロナのこともありますので、屋外のワークプレースや ICT 活用スペースを提案させていただきました。

次に 2017 年が実は御堂筋 80 周年、完成 80 周年でございますけれども、このときに作った 2018 年の大阪市の御堂筋将来ビジョンの中にそういう議論の結果が一部分、盛り込まれております。御堂筋の将来の姿を可視化するということで、下の図の左は現状ですが、中段には 2025 年の万博をめどに側道の歩行者空間化を目指すということが書かれております。最終的には、2037 年が御堂筋 100 周年でございますけども、そのときには、この右図でいきますと全てを歩行者空間化したらどうかというような提言、これ、市の提言者ですけども、こういったものがございました。

実はこの右端の将来ビジョンにつきましても、全てを歩行者空間化することが本当にいいのかということもわれわれの議論の中では出ておりまして、もう少し言いますと、2037 年になりますと、モビリティーもかなり進化しておりますので、必ずしもそういう歩行者だけの空間ではなく、自動のモビリティーも使えるような、あるいは自動車も一部分走れるような、そういったものにしてはどうかというような意見も出させていただいておりました。こういった形で、行政のほうとの連携といいますか、少し意見交換をしてきたという経緯がございました。

●任意団体から法人化への移行

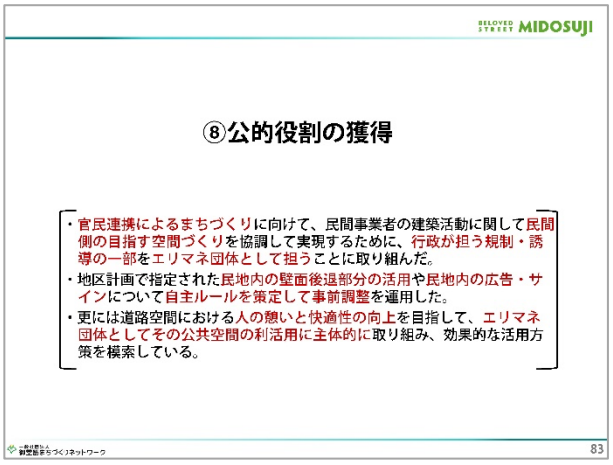
次に、7 番目。任意団体からの法人化への移行ということで、これにつきましては、先ほど、篠原さんからのお話にもございましたけれども、やはり活動が拡大していくということによりまして、われわれとしましても社会的な位置付けの向上も必要であろうというような考えが起きてまいりました。特にこの時期、全国的なエリマネ組織が増加していき、いわゆる大阪版 BID も含めてエリマネ団体が市民権を得てきた時期だったと思います。こういったことで活動も拡大してきましたので、いわゆる任意団体から法



人化の団体へ移行してはどうかということで、それによって対外的信用力向上、それから財源確保、組織の自律というものを目指そうということになりました。

これが 2017 年に移行しておりますが、それ以前に議論しました中身です。左上にありますとおり、2001 年の設立以降、活動の規模が拡大してきて、それから、任意団体のときには、3 年間で一度区切りを付けて継続するかどうかを会員で決めて進めておりましたがやはり社会的な位置付けや継続性が図れないのではないかというようなことも議論でございました。それから法人格を持たないということによる活動のリスク、こういったものもありましたので、下にありますとおり、法人化を目指そうということで、一部会員の負担金も少し見直しました。

ちょっと裏話をしますと、今、会員の会費は年間 20 万円なんですけれども、任意団体のときから 5 万円上げただけなんですね。任意団体のとき 15 万円で、今、20 万円なんですが、もう少し上げていってはどうかというような議論も、正直、ございました。ただ、なかなか合意に達しないという状況がありまして、一部分、経費的なもの、いわゆる法人になることによる経理的な処理を外部に出すというような費用が発生しますので、こういったものを会費で賄うという形できちっと法人格を得ていこうということに賛同を得まして、下にあります対外的な信用



力向上、これは、実は公物管理を許可されることに必要な都市再生法人の指定というものも法人格があることで受けれますので、こういったものを目指そうと。それから財源確保ということで、これも当然、収益事業を行えるようになっていくことを目指そうと。それから、そもそも組織の自律・継続性が高まるということで、一社法人化を 17 年にいたしました。

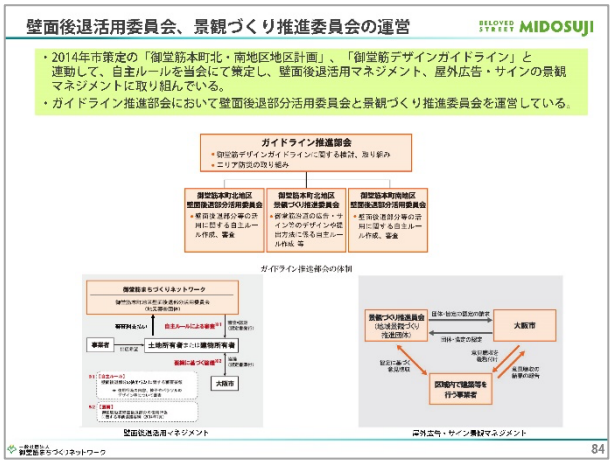
●公的役割の獲得

それから 8 番目、公的役割の獲得ということで、ご紹介いたします。当会は官民連携による街づくりを目指してきたわけですけれども、やはり民間側の目指す空間づくり、いわゆる地権者企業としてもオーナー企業としても、それぞれの持つ不動産価値を高める空間づくりについて協調して実現していこうということで、行政の担う規制・誘導の一部をエリマネ団体として担っていく取り組みを始めたのがこの時期です。特に民地内の壁面後退部分の活用や民地内の広告・サインに対する自主ルールを策定して事前調整を運用しております。

さらに道路空間における人の憩いと快適性の向上を目指しまして、エリマネ団体として公共空間の利活用に主体的に取り組むということで、パークレットなど先ほどご紹介しましたものに取り組んで、公的空間での主体的な運用というものも実験的に進めております。

まず、先ほどの壁面後退部分と広告・サインの自主ルールの件ですけれども、ガイドライン推進部会というご紹介しました部会の中に、委員会を設けております。ちょっと長ったらしいんですけれども、壁面後退部分活用委員会、真ん中に景観づくり推進委員会。左右は北地区と南地区の違いです。下の段の左の図にありますとおり、まず土地所有者などの事業者が壁面後退部分で何かをしたいというときに、左下に大変ちっちゃくて恐縮なんですけども、市の事前審査の要項というものが出来上がってまして、それに位置付けられた状態で、まず壁面後退を利用したいという土地所有者もしくは事業者が、当会に審査を依頼します。それで、御堂ネットのほうで審査をしまして、一応、了解という形を持ったものを土地所有者なり事業者が大阪市に出すということで、要項どおりになっているということで許可をする、こういった位置付けです。

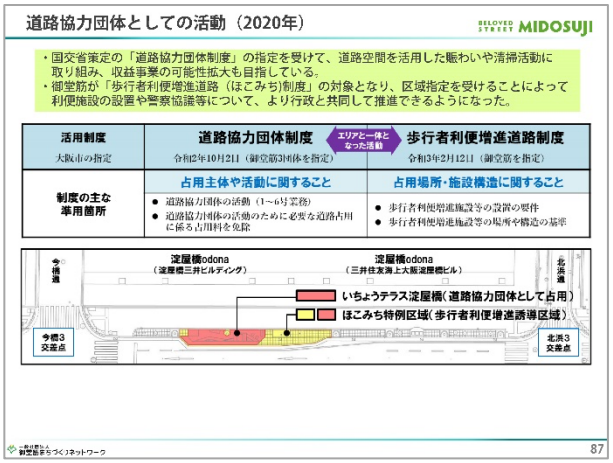
右側の景観づくり推進委員会と申しますのは、広告・サインを掲示したい方が、大阪市から、意見聴取を義務付けられており、そのかたがたと当会で意見聴取を行い、その結果を市に報告して許可をするという形になります。その前提としまして、大阪市からは、景観づくり推進団体という公的な位置付けを、エリマネ団体として受けております。こういった形で、運用を進めております。



これは自主ルールの中の一つですけれども、壁面後退部分のオープンカフェ、キッチンカー、あるいは物販とかパフォーマンスやるときのことなども、ある程度細かく、こういったことを目指してください、こういった統一感を持ってくださいというようなことも入れております。

広告・サインに関わる地域ルールですけども、右にありますとおり、サインの例えば大きさ、それから明度、彩度、こういったものも細かく規定して、これに見合うものなのかどうなのかというものを、事前にエリマネ団体として審査をするというふうな形の活動をしております。これをすることによって事業者の活動を規制するというよりも、われわれとしてやれることを、できるだけ統一感を持ってやっていく、かつ、できるだけ上質なにぎわいを維持できるような方向性を目指そうということで、取り組んでおります。

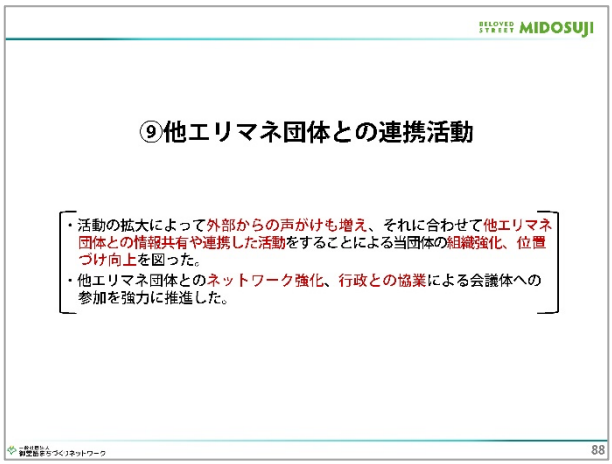
これがこの項目の最後ですけども、道路協力団体という制度を活用しております。下の図にありますとおり、先ほどから申しておりましたodona の前に、いちょうテラス淀屋橋というものを作っておりますけども、道路空間でこういう活用をすることは本来であれば認められていないんですが、例えば広告・宣伝をしたり、あるいはこういう場所を確保・設置して活用していくということについては、当会が道路協力団体に指定されていること、それから、御堂筋全体が、いわゆるほこみち、歩行者利便増進道路制度の指定を受けていることによって可能になっております。道路協力団体を御堂筋のエリマネ団体として受けていることによって、公的な空間を活用していくことにもトライしております。



●他エリマネ団体との連携活動

次、9 番目。エリマネ団体との連携ということで、以上ご説明した活動をすることによりまして、かなり外部からの声掛けも増えました。

かつ、他のエリマネ団体との情報共有や連携した活動というものも進めていくべきだろうということで、当会としましても、組織強化、位置付けを向上を図るべく、ネットワークを強化しております。また、行政との協業も進めております。

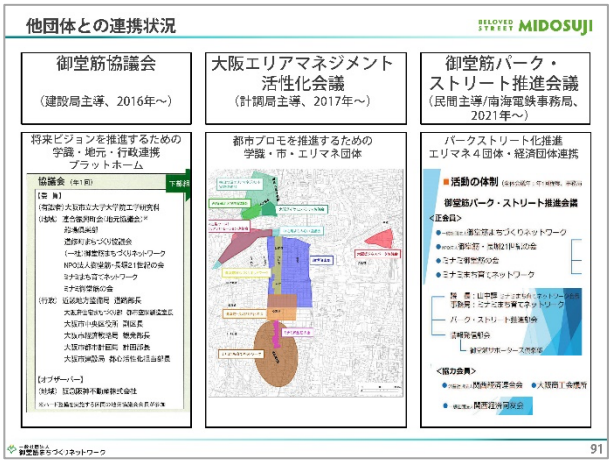


ご紹介しますと、例えば写真左ですね。船場げんきの会、今は船場倶楽部という名前に変わってるかと思うんですが、こういったものにも入会しております。先ほどご紹介しました大阪のクラシックの協議会にも参加したり、あるいは右上のような外壁ディスプレーの協力。それから、右下は近畿地整局が推進しておりましたSBJ 連絡協議会というものにも参加してきました。

それから、左半分は全国エリマネという組織のことですけども、2016 年に設立されたこういった団体にもエリマネ団体として入りました。全国のエリマネが 48 団体ぐらい入っていると聞いております。

右の半分は、姉妹ストリート協定の締結への協力ですね。大阪市とメルボルン、それからシカゴが姉妹ストリート協定を提携をしておりますけれども、こちらについて、シカゴ、メルボルンに大阪市にメンバーが同行いたしまして締結に協力するということも進めております。

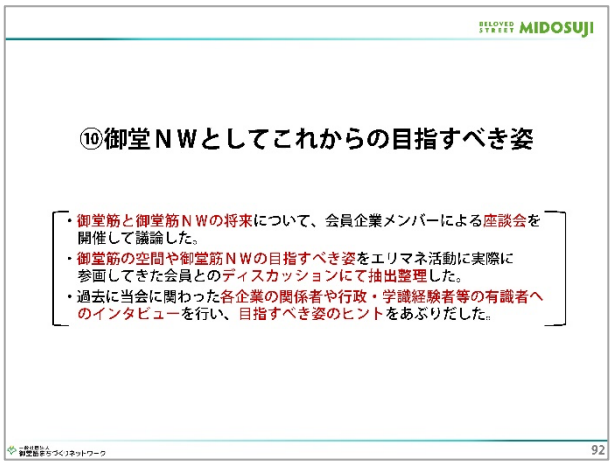
行政が主になっております協議会等で、左は御堂筋協議会、これは建設局主導です。真ん中が計調局主導の大阪エリマネ活性化会議。右は民間主導ですけれども、南海電鉄さんなどとご一緒して、御堂筋の 4 団体でプラットフォームとなる推進会議、こういったものにも参加をしております。



●御堂筋ＮＷとしてこれからの目指すべき姿

最後に、御堂筋ネットワークとしてのこれから目指すべき姿ということで、先ほど篠原さんからもご紹介ありました座談会、もしくは有識者へのインタビュー、こういったものをやりま

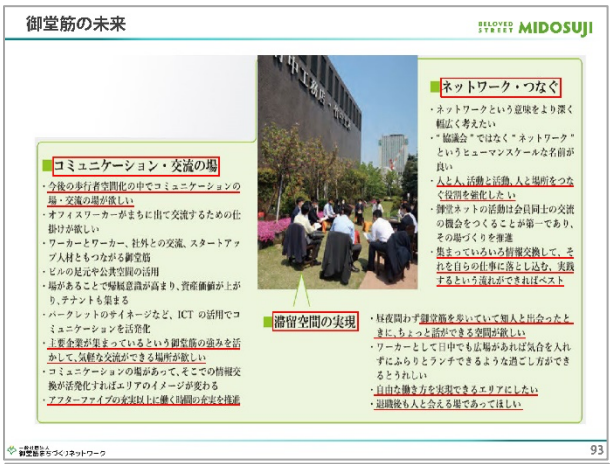
したものを基に、御堂筋と御堂筋㊀ネットワークの将来について、会員企業メンバーによる座談会を開催して議論いたしました。御堂筋の空間や御堂筋ネットワークの目指すべき姿ということで、エリマネ活動に実際に参画してきた会員とディスカッションをいたしまして、抽出・整理をいたしましたものを、ご紹介しまとめをしたいと思います。特に過去に当会に関わっていただいた、先ほどご紹介ありましたようなかたがたとか、あるいは行政のかたがたにもインタビューいたしまして、ヒントをいただいたというのが、この座談会とインタビューでございました。



こんな感じで、竹中工務店の屋上で、屋外でやりました。

出てきた内容としましては、まず御堂筋に関しては左にありますとおり、コミュニケーション、交流の場として生かしていくべきだとか、右上にあります、ネットワークとかつなぐということで、人と人、活動と活動、人と場所をつなぐような役割を強化していくべき場所だということでありますとか、あるいは滞留空間の実現ということで、ちょっと歩いて話ができる空間が欲しいとか、退職後も人と会える場所であってほしいという、そういった人が集まって、人と人とが会えるような空間であってほしいというような意見がございました。

街の機能といたしましては、特徴的なリニアな空間ですので、こういったところを生かした空間づくりをすべきであるとか、広場的なスペースの整備も必要ではないかと、歩くだけではなくて憩える空間となるべきというようなこともございました。それから、左下にありますとおり、周辺の住民との連携、ワーカーにとっての居心地の良さを充実させるべきだと。また御堂筋ＮＷに関しては、法人の公共としての位置付けを強化していくべきであるとか、あるいは新たな担い手の巻き込み方、エリアコーディネーターの設置なども考えていくべきだという話がございました。

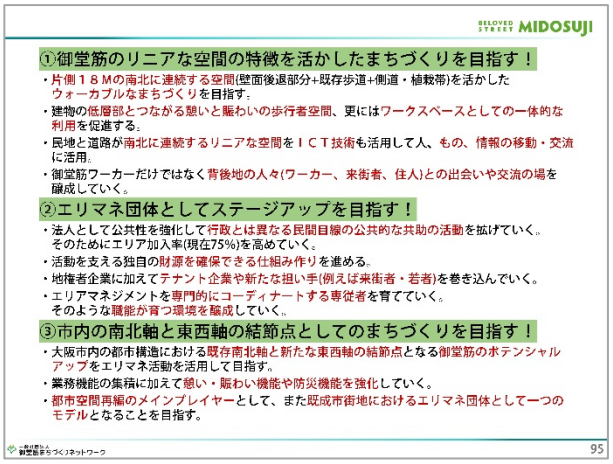


それらをもとに最後に大きく 3 つに整理しております。一つは、御堂筋のリニアな空間の特徴を活かしたまちづくりを目指すべきだということで、これは御堂筋の空間に対する考えです。片側 18 メートルの南北に連続する空間が、壁面後退部分と既存の歩道と、側道、植栽帯の全てを使うとできますので、ここを使ってウオーカブルなまちを目指すべきだと考えております。特に建物の低層部、こういった所とつながる憩いとにぎわいの空間、こういった部分をワークスペースとしての一体的に利用することができます。御堂筋の北側のビジネスエリアですので、ワークスペースとしての一体的な利用も促進し

ていくべきだということを考えております。特に御堂筋は、梅田、中之島等々と違いまして、民地と道路が交互に織りなす南北に連続するリニアな空間が、壁面後退部分も含めると片側 18 メートルできるわけですので、こういったところを、ICT の技術も活用して、物や情報の移動や交流ができるような場所に使っていってはどうかというふうに考えております。それから、御堂筋ワーカーだけではなくて、背後地の人々も含めてワーカーや来街者や住人のかたがた、こういったかたがたとの出会いや交流の場となっていくべきではないかということを、われわれも考えております。

それから、2 番目は、御堂筋ＮＷがエリマネ団体としてのステージアップを目指すことが必要と考えております。まず法人として公共性を強化して、第二の公共とも言えると思いますが、行政とは異なる民間目線の公共的な共助の活動をできる主体になっていくべきだと考えております。エリアの加入率が 75 パーセントでございますので、もう少しアップしていく必要があるかもしれませんけれども、こういったことも考えております。更に主体となるためには財源確保の仕組み、これも重要であろうと思います。もう一つは、あくまで地権者企業が主体ですけども、それに加えて、テナント企業や新たな担い手、例えば来街者であるとか、若者にも参画いただくような活動をしていける団体になっていくべきと思います。それからもう一つは、海外のエリマネ団体にはおられますけれども、エリマネ活動を専門的にコーディネートする専従者といいますか、プロですね、こういった方も職能として育つような環境を、エリマネ団体としても考えていくべきじゃないかっていうふうに思っております。

最後に 3 番目として、もう少し大きな視点ですが、市内の南北軸、要するに梅田と難波を結ぶ南北軸、これが御堂筋なんですけども、これにプラス、最近よく言われております東西軸ですね、舞洲からずっと、御堂筋の本町、それから森ノ宮のほうに通っていく大きな東西軸、この二つの軸の結節点になっていく場所が御堂筋でございますので、こういった所の特性を生かすべきだということで、既存の南北軸と新たな東西軸の結節点にある御堂筋のポテンシャルアップを、もちろんいろんな地権者企業が考えているとは思うんですが、エリマネ活動を活用してポテンシャルアップを図っていけないかと思っております。特に、業務機能に加えて、憩いあるいはにぎわい機能や防災機能、こういったものを強化していく必要があるというふうに考えております。最後に、都市空間再編の、われわれがメインプレーヤーとして、あるいは既成市街地におけるエリマネ団体一つのモデルになっていけないかというふうに考えております。そういうことをすることができる場所に御堂筋ＮＷ活動エリアがあるというふうに認識しております。



以上が、私どものほうからの説明でございます。

最後に、話が急に飛ぶんですが、実はうれしい通知がございまして。学会の関西まちづくり賞に御堂筋まちづくりネットワークの活動として、この 20 年間のものを申し込んでおったんですが、同賞受賞という通知が本日ございました。これは、1 回目の審査のときには、鳴海先生が何年もお一人で審査員をされていましたし、きょうは Zoom でご参加いただいているんでしょうか、UR の OB の千葉さんも確か何年か前に、審査員をされていたというふうに履歴では残っておりましたので、御礼をさせていただきいと思いましてご紹介いたしました。

以上でございます。ご清聴いただきましてありがとうございました。

■質疑応答

質問者 A；きょうは貴重なご講演、ありがとうございます。東京インスツルメンツという会社に勤めております、マスダと申します。弊社はどちらかというと、あまりまちづくりとは直接関係はないのですが、個人的な興味があって、今日は参加させていただきました。今回、関西まちづくり賞の表彰、同賞を受賞されたと伺いました。賞をいただけるまでのまちづくりができた決め手や、ここに至るまでのご苦労をお聞かせください。私は地方出身で、今後、地元に帰って、このようなまちづくりをやってみたいなと思っています。ぜひ、お聞かせていただければなと思ってます。

篠原；ご質問ありがとうございました。関西まちづくり賞の受賞のポイントは、審査員の方に聞かないと。岡先生、もし何かご存じでしたらコメントしていただければと思います。実は私から「こういう賞があるので応募してみたらどうですか」と高梨さんにお勧めしました。もっと早い段階で応募してもよかったのかなと思ってるんですけども、実はそういう学術的なところとの接点はあまり意識していませんでした。それでちょうど20周年という節目で、これまでの活動を整理して、その中身を見ていますと、これは値打ちあるなと思って応募したら、運よく受賞させていただけることになったということなんです。企業町内会的にスタートして、今や本当に大きなことを普通にサラッとやっているようにも見えるんですけども、そういう成長過程っていうものを評価していただけたら、都市計画学会としても他都市に活用できる事例だと思っていただけたのではないかなと推測しております。高梨さん、いかがですか？

高梨；ご質問、どうもありがとうございました。私、言うのを忘れていましたが、この賞を受けられたのは、篠原さんからこういう賞があるぞ、応募したらどうだということを強く言っていただいて、それで何とかここまで来ることができました。篠原さん、どうもありがとうございました。まずお礼を言うのを忘れていました。

それと、今のご質問ですけれども、やはり企業町内会というのがまさにその言葉のとおりなんですけれども、企業に所属しているけれども、ボランタリーな意識で活動に参加して、企業の看板をしょってるけれども個人の意見でやってきたということが、当会の場合は、ある一定、許されたということがあると思います。そこが他のエリマネ団体の活動と違うかなというふうに思っています。

それと最後に、地元に戻られてという話をされましたけど、私、それは非常にいいことだなと思っております。よく、最近、地域に移住とか結構やってますけれども、あるいは地域おこし協力隊ですかね、そういう職能もあると聞いておりますが、その姿勢としては、やはり個人ベースで活動に関わりを持っていくというか、そういうことを常に意識していけば、都心であろうが、地域・地方であろうが、やっていることは同じじゃないかなというふうに思います。当会の場合は都心ですが企業町内会的なことをやっているというその姿勢が、評価の一つになったのかなというふうに個人的には思っております。

質問者 B；本日は貴重なお話をいただきありがとうございます。NTT アーバンバリューサポートのヤマモトと申します。このセミナーに来る前に、高梨様がご執筆されている『最新エリアマネジメント』を読ませていただき、上質なにぎわいづくりや活力と風格あるビジネス街というところが、一つのキーワードになっているのかなと感じました。

その御堂筋の上質なにぎわいというところを今後も維持し続けていくために、財源や予算を確保し続ける、増やしていくことが重要だと個人的には考えています。そうした意味で、東京の丸の内とか日本橋のように、企業が一つの街を独占的に持っていて、いわゆる物件価値の向上に、エリアマネジメントが投資的な意味で貢献している所とは異なり、御堂筋は様々な企業が寄り集まってエリアマネジメントを行っている場所だと思います。このような場所で一般社団法人としてこの活動を維持していく中で、自治体に今後こういう施策をしてほしい、大阪版BID ではないですけれども、こうした政策を行ってほしいといった要望があれば教えていただければ幸いです。

高梨；ありがとうございます。まず上質なにぎわいっていいますか、そういったものを維持するのには確かに財源も必要ですけれども、われわれが考えている上質なにぎわいのある空間というものは、必ずしもエリマネ団体がお金を出してなんかやるっていうことだけではなくて、もちろんそういう部分もありますけれども、どちらかというとエリマネ団体に入っている各企業が、そのエリマネ団体の意識を共有する中で、自分たちの民間の活動のところをコントロールしていってもらう、そういったことが大事かなというふうに思っております。私の意見としては、必ずしも上質な空間を維持するのに、エリマネ団体として財源が必要ということには直結はしない。ただ、やはりそういうものを維持するために、先ほどから言っております自主ルールであるとか、あるいは行政との協議も含めてですけど、やっていくためには、当然、経費はかかりますので、そういったところは稼いでいく必要はあるかなというふうに思っています。

行政への要望としては財源確保という意味で具体的には、公的な空間の利用ということで先程ご紹介したパークレットに広告・宣伝用としてデジタルサイネージの機械を置いておりますが、ちょっと今、大阪市との取り決めの中で、お金を生む状況にはなってないんです。最終的には、公的空間での広告・宣伝の規制が緩和されてそこの広告収入をエリマネ団体として受けられるようになればと思っております。

質問者 C(Zoom 参加)；非常に充実したお話をありがとうございました。先ほどの質問と関連しますが、企業が集まって長期間にわたる活動を継続される中では、異動などにより担当者が変わることなども課題になるかと拝察します。全体としての活動のモチベーションを継続するという点において、工夫された点や、振り返って良かったことなどご教示いただければと思います（以上チャット）。

西尾と申します。非常に充実した活動を継続するというのは、各社が集まられる中で、ばらつきもあるのではないかと思いました。時期によって、モチベーションが上がったり下がったり、担当者によってもことなってくると想像しました。そのようなところでご苦労になった点や、逆に工夫された点があれば、お伺いできればと思います。

篠原；正確な答えになってるかどうかはあるんですけども、最初に将来像を 6 社で作ったということをお話ししたんですけど、その 6 社が初動期のパワーとしては大きかったのです。しかしながら、転勤ではなく、不動産を手放して会員資格がなくなったことにより、6社のうちの2社が退会することになりました。御堂ネットは地権者企業の集まりであることにこだわって活動しているので、淀屋橋 odona の開発が完成し、地権者でなくなった時点で、ルール通り退会となったのです。そのほか人事異動ももちろんいろいろあるんですけども、組織としてきっちり対応してくれているので、後任をちゃんと送り込んでくれています。なので、当時はそれほど困ることはなかったかなと思います。

私は御堂ネット以外にもボランタリーな活動もいろいろやっていたのですけど、そちらは転勤の影響は大きくて、中心になってる人がいなくなったら、その後任がその会社から送り込まれるわけでもなく、完全に抜けてしまって活動が停滞したり、終わってしまったりということも経験しています。この御堂ネットについては、会員企業が理解しサポートするという体制がある程度できているので、継続していってると感じます。高梨さん、いかがですか？

高梨；企業の異動によって活動に対する対応に濃淡が出てくるという話が、篠原さんが担当された創生期から充実期には、結構、逆に問題があったんじゃないかと思いますね。私が担当しました定着期以降は、どちらかといいますと、会社としてもちゃんと引き継ぎができていましたし、その時期というのは、ちょうど、CSR、いわゆる企業の社会的な活動が重視され始めてきた時期でしたので、比較的担当者の方も社内で位置付けがなされた中で業務に入っておられるというようなこともございました。

それともう一つ、入会率 75 パーセントと申し上げましたけれども、これはエリマネ団体の小林重敬先生がおっしゃっておられましたが、こういうエリアマネジメント団体の加入率って、7 割を超えてくると加入率がぐーっと上がっていくんですね。要するに入っとかないと損じゃないかとか、入っとかないとちょっとまずいな

というような雰囲気になるようです。実は、この数年で、かなり会員数が伸びまして、多分、10 団体ぐらいは入会していただいたと思います。やはりそういうような傾向もございますので、会社としてもきちっと位置付けて参画するということになりますので、初期の頃は非常に引っ張っていくのに苦労したという時期もあったとは思いますが、今は定着期から拡大期に入ってきておりますので、そういう意味では、担当者のモチベーションというものは比較的高く維持されているというふうに感じております。

■まとめ

澤田（ケイオス）；今日はいろいろと振り返っていただき、まとめて聞かせていただいて、ありがとうございます。御堂筋は大阪の宝だと思っています。そこで上質なにぎわいを目指して活動をされておられ、私もこれからもいろいろお力になりたいと思っています。改めまして、関西まちづくり賞の受賞、本当におめでとうございました。